

- 1 日時：令和5年11月22日（水）17:15～18:25
- 2 場所：かでの2.7 7階730号室（ハイブリット開催）
- 3 出席者

(1) 北海道観光審議会 アドベンチャートラベル部会委員（五十音順）

会場出席 鈴木委員、八木委員

ZOOM 荒井委員、石山委員、矢ヶ崎部会長 計5名

欠席 高田委員

(2) 北海道（事務局）

後藤アドベンチャートラベル担当局長、奥水アドベンチャートラベル担当課長ほか

(奥水課長)

それでは、本日出席の委員の皆様方お揃いですので、ただ今から令和5年度北海道観光審議会第2回アドベンチャートラベル部会を開催いたします。本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。道庁観光局の奥水です。議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の部会でございますけれども、委員6名中、高田様が都合により欠席ということで、5名の出席をいただいております。それでは開会にあたりまして、アドベンチャートラベル担当局長の後藤から、ご挨拶申し上げます。

(後藤局長)

はい。後藤です。いつもありがとうございます。2回目の部会ということでご多忙のところありがとうございます。

ATWS2023の今回は簡単な報告をさせていただいたんですけども、うちの実行委員会ももちろんですけど、JNTOさんですとか主催のATTAもですね、結果の振り返りというか分析みたいなものが今進んでおります。

私どもの実行委員会でも、年内に報告会を開催したいと思って準備をしているところで、決定いたしましたら、皆様にもご案内させていただきたいと思っております。

この振り返りの中で言及されているのが、ガイドの育成、必要性っていうのはもう皆さんの組織も自分のところの集めた振り返りの中では言われているというお話で、数だけではなくてやはり語学力などを含めて能力向上の取組が必要だっていうのは、皆さん、同じように言っているというお話が聞こえております。

北海道は、ATWSを見据えて、いろいろ、いち早く取り組んできたとはいえ、まだまだその充足というところに向けては取り組みが、しなきゃいけないことがいっぱいあるのかなど。人材育成というのは結局、とても時間がかかるので、次の世代、次の世代っていうその継続性も重要なのかなというふうに考えていますので、皆さんのお力を借りながら、また引き続き取り組み、進めていきたいと思っております。

本日の部会では前回の部会で委員の皆様からいただいた意見を踏まえまして、事務局が提案する、アドベンチャートラベルの山岳冬山の認定基準の設定や、アウトドアガイド及びアドベンチャートラベルガイドの目標数値の設定についてもご審議いただきます。忌憚のないご意見をいただきますようよろしくお願いいたします。

(興水課長)

本日の日程でございますけれども、遅くとも19時までには、終了したいというふうに思っておりますので、ご審議よろしくお願いいたします。それではこれからの議事進行につきましては、矢ヶ崎部会長にお願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

はい。矢ヶ崎でございます。本日もどうぞよろしくお願いいたします。早速議事に入りたいと思います。最初の議題はですね、アウトドア事業者等実態アンケートの中間報告ということで、こちらについて事務局よりご説明をよろしくお願いいたします。

(興水課長)

はい。それでは資料1をご覧くださいと思います。資料1、アウトドアガイド等への実態調査ということで中間報告となっております。こちらは10月30日から11月10日に北海道アウトドアガイド及び北海道アドベンチャートラベルガイドに対しまして、ウェブ上でアンケートを実施したものでございます。回答率は、ここにありましており28%と、まだ低い状況ではあるのですが、回答期限を過ぎた後も回答いただけない方に直接訪問するなどして、回答依頼しておりますので、ここの回答率はもう少し上げていくということでございます。今は、中間報告という形で報告をさせていただきます。

まず、ガイドの状況について、分析するに当たりまして、専業の方35名、兼業のうちガイド業が主としている方22名、この57名を112名の中からピックアップして、まとめたものでございます。

1 ページの活動形態のところでは、個人事業主が53%と過半数を占めております。

2 ページ目をご覧くださいのですけれども、右側にあります営業ツールでございますが、自社のホームページの回答が最も多く、次にツアーオペレーター経由となっているところです。

次3 ページ目をご覧ください。左側のグラフ、2023年度のガイド従事日数の見込みでございますが、101日以上の方が61%と大半を占めているところでございます。また右側のグラフの収入状況ですが、400万円未満と回答している方、このグラフで青っぽい色の三階層がありますけれども、その回答している方は、新型コロナウイルス感染症の最中でしたとか、今年度についても、依然400万円未満の方が多という状況ではありますが、ご覧のとおり、2023年度は400万円以上の回答者が、増加しているのかなというふうに見受けられます。これも、新型コロナウイルス感染症の影響が落ち着いて、アウトドアガイドの利用者も増えているということが考えられます。

4 ページ目をご覧ください。左側のグラフをご覧ください。今の話とも重なる部分ありますが、顧客数の累計では、こちら2021年度から2023年度にかけて、微増ではありますけれども、300人以上の回答が増加しているということがわかるかと思っております。

次に5 ページ目をご覧ください。②北海道 LOVE 割・道民割事業についてでございますけれども、前回の部会で、北海道 LOVE 割の影響についてご意見がありましたものですから、アンケートを取る前に設問項目に追加をしてアンケートを実施したところでございます。グラフのとおりで、事業終了後における売上の影響について、「大いに影響がある」、また「影響がある」の回答を合わせると65%となっております。事業実施による誘客の効果はこの北海道 LOVE 割、一定の効果があったのかなというふうにご覧いただいております。

続きまして6 ページ目をご覧ください。③アドベンチャートラベルについてでございますけれども、取り組み状況は、左側のグラフになりますが、すでにアドベンチャートラベルのガイドに取り組みされている方の他、PSA・DOA等に参加、それから行政等のAT関連事業の参加までを

含めると、6割の方が、何らかの取組を行っているというところですが、真ん中のグラフになりますけれども、アドベンチャートラベルの顧客数は、まだ、少なく、今後の取り組みとしては、アドベンチャートラベラーに向けたプロモーションが必要と考えられるところです。

次7ページ目をご覧ください。アドベンチャートラベル振興の必要性について、というところですが、「大いに振興すべき」、「振興すべき」、この二つ合わせると95%となります。またその右側になりますが、本道のATにおける課題につきまして、ガイド等の育成・技術向上、人材確保という回答が上位を占めているところです。

最後に8ページ目になりますけれども、④北海道アドベンチャートラベルガイド資格についての設問に対しまして、ATガイドの資格については、約8割の方が関心があるということで回答していただいております。一方、英語力につきましては「不得意」と回答している人が、同じく8割ぐらいいらっしゃるということで、英語力の向上が課題と考えているところです。

まだ中間報告ということですが、回答していただいている方の数を増やして、最終報告ということで、できれば次回の部会の中でご説明できればというふうに考えております。事務局からの説明は以上でございます。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございました。中間報告ですけれどもある程度トレンド傾向が見えてくるかなというふうにも感じております。今ご説明いただきました内容、ご意見やご質問等、委員の皆様方、ございませんか。いかがですか。どうでしょう。

委員の皆様からちょっとご意見感想なりいただく前に、私の方から一個だけ確認させてもらっていいでしょうか。6ページなんですけれども、6ページのところの、○が三つあって向かって一番左の取組状況なのですが、これはすでにガイド実施とかPSA・DOAに参加とかいう選択肢でこれ1個だけ選ぶやつですか。複数回答になるような選択肢のイメージがあったんですけども。

(興水課長)

はい。これは1個の選択にしております。

(矢ヶ崎部会長)

はい。わかりました。複数回答かなってちょっと思ったので。はい、了解です。もしよろしければ、ご感想なりとも頂戴できたらと思うんですけど。

荒井委員いかがですか。こんな感じでしょうか。

(荒井委員)

実感としてはそうですね、みんな興味はある、だがしかし、そこまでやっぱりコストをかけて取りにいったメリットがあるのかって考えてる方が多分多くいる。

一方で、僕らぐらいガイド10年ぐらいやってる人たちは、取るべきだな、って思っているのが僕の実感値なんですよね。

というのは、昔はガイド制度ができた頃、あってもそんなに意味ないよ、みたいなふうに僕らも実は感じていたが、やっぱりインバウンドやるようになって、ぱっと見て、すぐにバッジがあったらすぐに自分のポジショニングとか力を証明できるっていうのが大分普及してきているので、私的にはですね、ガイドも5年10年やってるメンバーに皆取れって言って、そこでどんどん引き上げていくような動きをちょっとする必要はあるなと感じてるのが私の実感値と今回のこのアンケート結果を見たところです。だから結構あってるなと思ってます。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。やっぱりムーブメント起こしていくのは、ガイド達にどれぐらいみ
たいなターゲットがありそうですね。

(荒井委員)

はい。石山さんと、こないだも Leave No Trace とサステナビリティの研修をやっていますけ
れど、それをみんなそんな観点でどんどん取ってくれていますし、救急救命の方も Wafa の方も
僕らのガイドも、どんどん取っているんで、この勢いをちょっと維持したいなっていうのが感
覚です。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。石山委員いかがですか。

(石山委員)

はい。お疲れ様です。ご無沙汰してました。一回目すいませんでした。頂いた結果について
は特に違和感はなく感じてなくて、思ったよりしっかり認識していただいているのだからなっ
ていうふうには思っています。

あと、付け加えるのであれば、やはりガイドさん自身が、今後どのように取り組んでいくべ
きなかなっていうところに、やっぱり濃淡がちょっと出ているような気がして、やはり、ある
程度こういうことを目指してるので、ご協力くださいみたいな筋があったほうがいいのかなっ
ていうのが一つと、もう一つはやはりアンケートでも、8 ページになりますけど、やっぱり今、荒
井委員と J S T S - D でサステナビリティの研修とか野外救急とか全道で取り組んでますけど、
いわゆる資格的なもので自信をつけていくのも一つですけども、やはり英語力が不得意って
いうところが明らかに今までで一番多いんじゃないかっていうくらいの 8 割以上の人が英語に不得
意感を感じていて、これがひいては、AT への関わり方への、やっぱりフィルターになってると
思いますので、ここを、ここまで正直にアンケートを書いていただいたものであれば、逆にその自
分不得意から普通・得意になっていくために、どんなことを、どんなサポートがあったらいい
のかなっていうところを引き出していければ、全体のボトムアップには繋がるというふうによ
うに思いました。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。確かにはっきりと出てますから、かえって、じゃあ次どうするって
いうことも、道が見えてくるってところがございますですね。

ありがとうございます。鈴木委員いかがでしょう。

(鈴木委員)

はい。一つだけ。回答率がやっぱ 28% で、多分、このアンケートの発信が AT、アウトドアア
ドベンチャートラベルガイド資格制度についてのみみたいな発信は多分、AT っていう名前につ
いてますもんね。すごい意識高い系の方が答えてるんだろうなと思うんです。その 28% のやっぱ
り比率をもうちょっと上げないと。現実の裏で答えてない 300 人はすごく大事だと思んで、何と
かもうちちょっと比率を上げられないかなあと思っています。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。この比率を上げるのは、これからも事務局の方で鋭意ご努力
いただくっていうことですね。

(奥水課長)

はい。前回令和3年にアンケートを取った時も、実は中間報告の時には20～30%程度で、その時も、委員の皆様方からですね、ここの回答率を上げなければいけないというご意見をいただきまして、その後、電話等々でアンケート回答してくださいという呼びかけをした結果、5割ぐらいいまで上がりました。

ですので、今回も同じような形でもう既に現地に行って直接アンケートをお願いしてきたりもしていますが、引き続き、電話等も含めて、これからやっていきたいと考えております。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。事務局にお手間ですけれども、少しでも回答いただけるよう、お願いいたします。

では、八木委員お待たせしました、いかがでしょうか。今、データご覧になって、どうでしょう。

(八木委員)

私も鈴木委員と同じで、この数でどれくらい精度が上げられるかわからないんですけども、やはりアドベンチャートラベルの新しい制度とアドベンチャートラベルについての理解度が4分の3は理解しているとはいえ、4分の1は十分わかっていないということと、新しい制度についても、これだけの意識の高い人たちの中でも十分熟知されていないのではないかと思います。こういうすばらしい制度だったら、頑張って取ろうっていう感じにシフトしていないというのが、このグラフを見た感想です。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。確かにそういう数字がちょっと無視できない割合で今の段階でもございます。はい、ありがとうございます。

今、各委員からのご指摘等を踏まえて、また引き続き、事務局の方で、最終取りまとめに向けてご努力いただけますようお願いしたいと思います。

それでは議題の次、二つ目に移ってまいりたいと思いますが、大丈夫でしょうか。二つ目はですね、北海道アドベンチャートラベルガイドの認定等制度の運用について事務局よりご説明をお願いいたします。

(奥水課長)

はい。それでは資料2をご覧ください。前回の部会では、ガイド従事日数の推薦者につきまして推薦者を拡大し、既存の北海道アウトドアガイドの5分野につきましても、相当するものを追加するということとともに、事業所に所属してる人については事業所からの証明があれば推薦者を不要とするということで、このことについては了承いただいたところでございますが、山岳の冬山分野と、サイドカントリー、バックカントリーの必要従事日数について、通算することを可能とし、山岳冬山の従事日数を200日から、サイドカントリー、バックカントリーと同じ120日に変更したい旨、ご意見をお諮りしたところでございます。

委員の皆様方より、日数を短くすること、200日を短くするということは、ご了承をいただいていたところですが、山岳の冬山分野と、サイドカントリー、バックカントリーの合算の仕方について、具体例で申し上げますと、山岳冬山だけ、120日をやっただけでクリアしている人が、冬山の実績だけで、バックカントリーに申請できるのかというようなご意見もいただいたところでございます。

実態を踏まえまして検証するべきという意見をいただきましたので、そのご意見を受けまし

て、事務局からですね、北海道山岳ガイド協会の役員の皆様にですね、ガイドの必要従事日数を通算 120 日にすることについてご意見を伺いました。

ヒアリングの概要は、①から③までそれぞれ各個別の意見が載せておりますが、すべて説明すると時間が足りなくなってしまうので、図にまとめたものが 2 ページ目の中段以下になっております。

専門家の皆様方からは、合わせて申請する場合、積雪期間から考慮して、冬山のガイド必要従事日数、これが 2 年間で 120 日として合算させるということは、異論がなかったというところがございます。その合算の割合につきましては、サイドカントリー、バックカントリーのガイド従事日数を、一定割合従事していることがやはり必要だと、冬山とサイドカントリー、バックカントリーではですね、やはり危険度も相当違うということもありますし、登り方それから降り方も含めてですね、全く違うもの、ただ、共通している、冬山の危険性とかそういったものはありますというようなこともご意見としてはいただいております、その一定割合従事しているということが必要ですということについて、図に表しているとおおり、120 日のうちの 2 分の 1 ですか、3 分の 2 ですか、意見は割れたんですけども、ご意見をいただいたところでございます。

若い人がガイドされている方もいらっしゃるしまして、若い人に関しましては、まだ固定客も取れていないという方もいらっしゃる、また兼業で、夜、飲食店で働いたりとか、そういったガイドの方もいらっしゃるという話も受けましてですね、120 日ではなくて、100 日で、若手のガイドに配慮して、申請を若い人にも申請をしていただくということであれば、2 年間で 100 日としても、この安全性というところでは問題がないというところもご意見をいただきまして、その部分での 3 分の 2 以上をサイドカントリー、バックカントリーでカバーするというところで、100 日の 3 分の 2 ですので、66 日という数字になるんですけども、切りの良い 70 日ということにしまして、100 日に対しての 70 日をサイドカントリー、バックカントリーを必要従事日数とするということで、事務局としては 4 番の事務局案に書いてある、今、ご説明したようなことで、事務局案としたいということでございます。3 名の有識者の方にご意見を聞いた結果、このように事務局として案を作りましたので今日ご審議いただければと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。実際にバックカントリーのガイドをされていらっしゃる複数の方からのご意見をまとめていただいたの事務局案ということになります。

いかがでしょうか。これについてご意見、いただければと思いますが、どうでしょう。

(荒井委員)

はい。

(矢ヶ崎部会長)

はい。お願いします。

(荒井委員)

基準日の 3 分の 2 以上で冬山に合算っていうのは合理的だなと思いました。実際問題、自分に当てはめたら、日数多すぎるなって。

ただし、高田さんでしたかね前回ね、少なすぎたりするのも問題だっていう話だったので、私も実感がわかなかったんですけど、この日数で、バックカントリースキーガイドの皆さんが OK っていうのが、一番現場の現実的な数字かなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。

そうすると、荒井さんとしては事務局案は妥当ではないかという。

(荒井委員)

はい。今だから後は何がオチがあるのかなって、また次の何か何かしら考えはないのかなって今も考えているのですが、今のところはわかりません。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。他の委員の方々いかがですか。

(石山委員)

石山です。よろしいでしょうか。

(矢ヶ崎部会長)

はいどうぞ。

(石山委員)

事務局案でいいと思います。現実的な日数だと思いますので、このぐらいの稼働で、バックカントリー、サイドカントリーの比率が高ければ、よろしいかと思います。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。会場にご出席のお二方、どんな感じでしょうか。

(鈴木委員)

はい。現実的で合理的だと、すごく事務局案に賛成です。一つだけ、若手の方を手挙げて欲しいので、100日まで下げるってところは非常に片方では大正解だと思うんですけど、それでもすごいたくさんの方がなることはないか、そのようなことはないか。実は基準としては120日の方がATガイド資格制度としては、威厳を守るのに良いんじゃないかとか、そういう数の問題、そんなことよりもまずはたくさんの方に興味を持ってもらうべきなので100日にするとか、ちょっとその判断基準だけ、どうかなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。確かに今のご指摘の点っていうのは、ちょっと、説明はちゃんとできる方がいいですね。はい。まず、八木委員のご意見もお伺いしてから事務局の方にコメントいただきたいと思います。

(八木委員)

前は出席できなかったもので、日数については皆さんで十分に審議されたかと思います。役員Cさんはニセコで山岳ガイドをされていますが、ニセコは山岳ガイドが非常に少ないエリアで、しかもインバウンドが多く集まっていて、人手不足が深刻だと思います。

今回、人材育成とか若手の育成が重要なテーマだと、最初のお話でも聞いていますので、役員Cさんの意見というのは非常に大事な意見だと感じております。日数については、皆さんのご意見にお任せしたいと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。一旦この段階で、事務局の方でいかがですか、コメントいただけますか。

(奥水課長)

はい。ご意見ありがとうございます。3人の方に意見を聞きまして、最近の冬山の状況についても、いろいろ聞いたところでございます。やはり暖冬化というところもありましてですね、だんだん冬山に登れる期間が短くなってきてしまっているということで、もう12月も押し迫ってこないとなかなか登っていけないし、ゴールデンウィークぐらいまでという所であると日数も昔より大分少なくなってきているというような話も聞いております。

また、これもその傾向は今後も続くのかなというところもありまして、実際、役員Bさんに関しましては、バックカントリーとかもやっておりますけれども、役員Bさんでさえ、120日ぐらいが稼働してる日数だというようなことも話しておりました。

ですので、やはり若手の方にもですね、このガイドの資格ももっともって取ってたくさん取っていただきたいというところが、道の考えとしてもありますし、私も役員Cさんに直接ヒアリングをしたんですけれども、若手が100日ということで、本当に大丈夫でしょうかということも念押しさせて聞かせていただきました。その部分では安全面では100日であっても全然大丈夫ですよということで、ご回答いただけましたので、今回100日ということで、提案をさせていただいたところです。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございました。実際、念押しもしていただいたということで。

はい、どうぞ。荒井さんどうぞ。

(荒井委員)

日数に関してはおっしゃるとおりで、僕も実は100日で十分かなと思ってます。

実際問題としては、だって12月1、2、3、4月いっぱいとかなので、月に10日間の稼働で1年間で50日とかそのぐらいだなんて僕ちょっと見積もって、そうすると毎週末ぐらいですよ。なんか、確かにそのぐらいが何か妥当だって本当に思ってて、それで2年間で何とか月10~12日間を2年間やるぐらいは、妥当だなと、確かにそれが120日に伸びようが100日に伸びようがそこでそんなになんか能力的にとか、経験的に差が出るっていうのもないのかなって考えると、僕は役員Cさんの意見は妥当だなんて思いました。

若手に配慮するというのを置いといたとしても、なんかそのぐらいが現実的な数だなと思いました。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。

それでは、もしご異論なければ、事務局案ということで、私たちは合意をしたということにさせていただきたいと思いますが、よろしいですか。はい。ありがとうございます。

(荒井委員)

120日って言うてくださった役員Aさんにもう一言聞いておくみたいな感じじゃないですかね。Aさん120日って言ったんだけど、下げるわけですから。ちょっと気になりました。このプロセスとして。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ご配慮ありがとうございました。やっぱりそのフィードバックも大事だと思いますのでどうぞ事務局の方で、ご対応くださいますようお願いいたします。

(奥水課長)

わかりました。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。では三つ目の議題ですね、北海道アウトドア活動振興推進計画の中に指標があります。その指標のうちですね、北海道アウトドア資格保有者数、資格の保有者数の目標設定です。これについて事務局の方でご説明をお願いしたいと思います。お願いします。

(奥水課長)

資料3-1をご覧ください。北海道アドベンチャートラベルガイドの創設に当たりまして、北海道アウトドアガイド資格制度につきましては、引き続き制度を維持していくということになりましたので、従前の北海道知事認定アウトドアガイド資格保有者数の増加の指標を残しまして、アドベンチャートラベルガイド数の増加の指標を加えた二つの指標としたいと、前回の部会の中で事務局からご説明をさせていただきまして、この二つの制度の指標を設定するというについては、ご理解をいただいたところでございました。

北海道知事認定アウトドアガイドの資格保有者数の増加につきましては、委員の方々より、修学旅行のエージェントなどが、北海道アウトドアガイド資格制度を持っているガイドが足りないというような声ももし出ているのであれば、10%という指標を前回はご提示させていただいたんですけども、20%とか、30%とか、そういう目標にしていかなければいけないかもしれないというようなご意見も頂きました。

このため、ANTA及び北海道観光振興機構の方からですね、道内エージェントを紹介していただきまして、ヒアリングを行ったところでございます。

ヒアリングの内容につきましては、この資料の3、関係者へのヒアリングのところに記載をしております。2ページ目になりますけれども、ヒアリングの結果、教育旅行で多く採用されているラフティングがあるんですけども、ガイド不足というよりも、ガイド不足で行程の変更を余儀なくされたという事例は、どちらかというところと少なく、ボートの数が不足しているですとか、どうしても修学旅行シーズン、小学生なり、高校生なり、時期が重なってくるというところから、特定の川ですとか、時間に集中してしまっていて行程が組めないですとか、そのガイドの数と別の理由によるものが多いということがヒアリングの結果、導き出されました。

事務局案としてはですね、指標設定の基準年である令和2年度のガイド数、これが500人であったものですから、今、令和4年度、昨年度の末ですね、令和5年3月31日現在で、実は500人から528人まで、数字としては増えて、ガイド数としては増えてきているところでございます。計画期間も残り2年となるというところでもございまして、事務局案としては、前回同様、前回、達成できなかった前期の第4期の計画の時に達成できなかった10%の増加の目標、これを据え置きとしてですね、500人から10%を増やした550人を、令和7年度の目標指標としたいということで考えております。

ただし今後もですね、引き続き、教育旅行エージェントですとか、アウトドアガイド、ATガイド等へのヒアリングも引き続き継続していきまして、また次期計画の時に再検討、このガイド数の指標については再検討していきたいということで考えておりますが、今回につきましては前回と同様の10%増ということ、もう一度事務局案として、提示させていただきたいとい

うことで今日ご審議いただきたいと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ご説明ありがとうございます。前回の委員からの意見を踏まえて、改めて作業していただいた上での事務局案の提示がありました。

これについて皆様方からご意見を頂戴していきたいと思いますが、どなたからでも結構ですので、いかがですか。すみません、会場のお2人の場合は、ちょっと私の方で、見えづらいのでどうぞ音声でガッと発言していただけると大変ありがたく存じます。

(鈴木委員)

前回僕が足りんのかっていう話をしてたんで、聞いてくださってありがとうございます。

このちゃんと裏付けも含めて、論理的に良いと思います。

全然別件で一つだけ。ものすごい今高齢化が進んでるイメージがあって、単純に10%アップってもちろん目指す目標として今回設定するんですけど、なんかその若手に若い方々にもう1回、アウトドアガイドっていう仕事っていうのは認識する、要は働きかけとか、多分そういうことも必要になってくるんだらうな思います。もう終わりだね俺たちの50後半から60ぐらいの方がすごいいっぱいいて、実は犬ぞりのすごい南富良野の大事なガイドさんも、この前練習中に転んじちゃって怪我しちゃったんですよ。最近、すごく高齢化の危機感を感じています。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。人数も大事だけど、年齢構成っていうか、中身ですよ。

ありがとうございます。他にいかがですか。荒井さんミュート外れてきつとお話しされる体制になってるところかと思います。

(荒井委員)

シンプルに事務局案に賛成ですということでした。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。石山委員いかがですか。

(石山委員)

はい、数自体は賛成です。ただまあ、数だけを追うのではなくて、例えば、先ほどのアンケートでもレスが28%をとっている形になっていたり、いかに資格を持った人がちゃんと活動できるかっていう活動しているかっていうところが、多分一番大事な部分だと思うんで、それもちろん併せ持った形になればいいのかなと思ってます。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。ではお待たせしました。八木委員ご発言をお願いいたします。

(八木委員)

こちら前回の審議に参加していなかったんで、この増加率に関しましては皆さん問題ないということで、私も問題ありません。ただ、この数が北海道にいる全体のガイドの中で、職業としている人が北海道にどれぐらいいて、そのうち500人ってどれぐらいの割合なのか、私はそちらの方が気になりました。500人が550人になったことが、全体の中でかなり数を上げてい

ると感じるものなのかがわかりません。私はその全体の数字、179市町村にガイドが何人いて、その中の何%が取得しているのかを知りたいです。できるだけ100%に近づけるといふか、過去の部会でも発言したんですけど、医者とか弁護士で資格がないのにやってる人がいないように、北海道では資格がある方がガイドをやっていて当たり前というような状態に持っていければと、この制度について考えていたので、そういうふうに感じました。

(矢ヶ崎部会長)

はい。どうもありがとうございます。

それでは皆様のご意見、事務局案は、これでよろしいだろうということだと思いますけれども、いくつかコメントをも頂いております。それも含めて事務局から今の段階でお話できることで結構ですので、少しコメント頂けますか。

(興水課長)

はい。今、八木委員から発言があったことを、令和3年度でしたか4年度でしたか、部会の中で、ご発言があったなということ、私も記憶しておりました。その時には、このガイドの全体のアウトドアガイドの資格認定を受けている以外の方のガイドの数というのはですね、なかなか追い切れないというようなご回答させていただいたと思いますけれども、それで今の日本の制度上は、ガイドの資格がないからガイドができないというような制度ではないので、そこは誰でもガイドが実際にできてしまうというところがありますので、実際のガイドの方がどのぐらいいるのかっていうのは、数字としては把握しておりませんが、道としては、道民の皆さん、また道内にアウトドアを楽しみに来ていただく道外、外国人の方々に、安心安全でこの北海道のアウトドアガイドを楽しんでいただくという、もともとのこの趣旨というか、思想というか、それを達成するために、ガイドの数を増やしていきたいというところは、考えているところです。

また、先ほど、高齢化が進んでいるという話がありました。平成14年度からこの制度を開始して、もう20年以上が過ぎ去っています。その20年という月日をガイドの皆様方もですね、継続している方は同じように、年齢を重ねていただいているので、どうしても高齢化が進んでいるというところは否めないというところだと思います。そういった面では、若い人たちにも、ガイドっていうところに興味を持っていただくということが大事だと思いますし、まあそこは何度も議論が出ているように、ガイドっていうものが夢の持てる稼げるガイドであるということが大事だというふうに思いますので、そういう制度に北海道アウトドアガイド、ATガイドも含めてなるように、これからやっていかなければいけないと思ってますし、こんな話して良いのかわかりませんが、今年、札幌大学に私、臨時講師で呼ばれて、北海道アウトドアガイドのことを講義させていただきました。その中で、なるべくガイドに興味を持っていただけるように説明はしたつもりです。そのあとのアンケートの中では、全然知らない制度で、ガイドについて興味を持ったっていうような嬉しい言葉も頂いたので、そういうような機会もですね、今後、積極的に我々も受けて、若手の方がガイドになってくれる関係づくり、それはやっていきたいというふうに思っておりますので、委員の皆様方にもご協力よろしくお願ひしたいと思います。ご意見ありがとうございました。

(矢ヶ崎部会長)

はい、事務局からの前向きなコメントも大変ありがとうございました。

では、事務局案をベースに進めていただくということで、また同時に、この数も大事ですけども、より多くの方々にガイドという、お仕事の魅力が伝わるように、同時に、こういった広報的な取り組みもしっかり忘れずやっていくということも大事だと思いますので、よろし

くお願いしたいと思います。

それではですね、次の議題はアドベンチャートラベルガイドの目標設定ということです。これについても事務局からのご説明、まず、よろしくお願いします。

(奥水課長)

資料3-2をご覧ください。前回の部会でご説明しましたとおり、9月30日現在の北海道アドベンチャートラベルガイドの認定者数、こちらの資料にありますとおり、延べ人数で19名となっております。

前回の部会では、委員の皆様からAT資格制度のガイドを北海道は増やさなければいけないというのは、これまでのATの取り込みの文脈上、間違いない流れだというご意見ですとか、中身がしっかりできている方の数を固めて、第一段階は経ていかないと、その先に広がっていかないと、見えてこない、そういう実態を踏まえた数字で、この指標の設定を落としどころとしていかなければいけないというようなご意見もいただいたところでございます。

それで事務局ではですね、今年9月に開催されましたATWS2023のPSA・DOAにおいて、実行委員会が把握しております、体験ツアーでの実際にガイドされた人のうちですね、北海道アドベンチャートラベル認定制度に必要な資格を持つてるガイド様、サイクリングの資格ですとか、北海道アウトドアガイドの資格ですとか、山岳ガイド協会の認定ガイドの資格ですとか、あるいはスルーガイドに繋がる通訳案内士の資格ですとか、そういった数を一人一人精査させていただきまして、加えて、既にATWSではガイドをしていなかったけれども、すでに認定のアドベンチャートラベルガイドとなっている方、この人数を積み上げた結果、こちらの資料にありますとおり、76名となりました。

これらの方々につきましては、最低限、これから我々アドベンチャートラベルガイドの申請を呼びかける、促していくということをやっていくということになるかと思えます。

引き続き、山岳ガイド協会ですとか、通訳案内士協会などの業界団体を通じて、呼びかけ、通訳案内士協会につきましては過日、今月の1日でございますけれどもそれに、協会の理事長にご説明をさせていただきまして、周知も行ったところでございます。

さらには、現在実施している技能能力向上のための研修の受講生にも積極的に制度の周知を行っていくことでですね、この76名から上乗せをさらにしまして、全体で100人というところを目標としたいというふうに考えているところでございます。事務局の説明は以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい。どうもありがとうございます。こちらの数値も前回の委員会での検討を踏まえて、再度見直しをしての事務局再提案ということになります。

では、100名ということでありまして皆様からご意見伺ってまいりたいと思います。どなたからでも結構ですいかがですか。

(荒井委員)

はい。

(矢ヶ崎部会長)

荒井さん。はい、どうぞ。

(荒井委員)

これはいけると思えます。いけると思えますって、変ですけど、ずっとやってるガイドが次のステップに行くのに、みんな興味もあるしチャレンジしたい内容だなと思っていて、ただ手

続きが面倒なので、プッシュしないといけない。ていうのを実際うちのスタッフにまずやります。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。他はいかがでしょうか。どなたからでも。鈴木委員、お願いします。

(鈴木委員)

人数は本当に多ければ多い方がいいと思いますし、逆に言うと今日の前でリストアップした人達全員に取らせるという目標ですよね。非常にチャレンジだなというふうに思いました。

でも、この目標を置くのはいいと思います。これいつまでについていう期限を切るんですけど。

(奥水委員)

R7年度でございます。

(鈴木委員)

それは今こうですね。6、7の終わりに100になっている。すごいですね。荒井さんも今なんか良いつて言ったんで良いと思います。

(荒井委員)

いけると思う。これは、僕らの仕事です。

(鈴木委員)

そうね。だからそれと同時進行で、このATガイド資格制度を取るとメリットがあるっていう、この間のホームページの話もそうですけど、何かしらのプッシュ要因がないと、取った方が良くって荒井さんが言うだけじゃやっぱり、皆、うんなんて言わないでしょ。ていうところが、凄く感じました。

後あの、通訳案内士じゃなくてもスルーガイドはOKですね。別に資格を持ってなくても。

(奥水課長)

そうですね。英語の資格を持っていれば、通訳案内士でなくても大丈夫です。はい。

(鈴木委員)

なんか、通訳案内士って書いちゃったら、またね、法律変わったのに、あれまたダメなのかって話に見えたら嫌だなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。石山委員いかがですか。

(石山委員)

ガイドの数については、問題ございません。これでいいと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。毎回トリを取っていただいて恐縮ですが、八木委員お願いしたいと思います。

(八木委員)

初めての制度ですので、100 っていうのはわかりやすく、かつ、気合いが入った数字なので良いかと思います。

実際に北海道アウトドアガイド資格を持っている方が 500 数十人ということで、延べ人数としての 100 人なので、リアルに 100 人ぐらい出てくれたらすごく頼もしいなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。それでは事務局提案の 100 名ということで、令和 7 年度末段階では 100 名いるっていう、そういうことですよ。そういう目標ですよ。

(奥水課長)

そういう目標です。

(鈴木委員)

すごいな。

(鈴木委員)

荒井さん 5 個ぐらい取らなきゃ駄目なんじゃないの。

(矢ヶ崎部会長)

荒井さん数数えてください。はい。それでは、ある意味意欲的ではありますがけれども、でもやれるんじゃないかっていう手ごたえを持ってらっしゃる方々もいらっしゃるという、非常に心強い数字でもあると思います。

この事務局案で進めていただくとということで、皆様のご異論がないようですので、よろしく願いいたします。事務局何かコメントございますか。

(奥水課長)

はい。頑張りますということです。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。事務局だけではなくみんなでやっていくってことだと思いますし、プッシュ要因についても、もっといろいろ考えなきゃいけないかもしれませんが、目標としては、良い目標が設定されるのではないかなというふうに私もちょっと思ったりいたします。はい、ありがとうございました。

本日の議事は皆様方の大変ご協力をいただきましてサクサクと進みましたので、非常に速いペースで来ております。議事は以上なんですけれども全体を通して、何かご意見、発言し忘れていることであるとか全体を通しての感想であるとか、何でも結構ですので、少し、ご発言をいただければと思います。何かございますでしょうか。

(鈴木委員)

はい。

(矢ヶ崎部会長)

どうぞ。

(鈴木委員)

今日この場でなくてもいいんですけど、前回のホームページの議論だったり、先ほどのずっと北海道アウトドアガイド資格制度が、あんなにすばらしい制度を作ったのに、途中でああだこうだ文句を言われるとか、実際にその喉乾いてない人にこの資格制度を提供しても多分飲まないと思うんですよね、水を。やっぱりそのさっきプッシュ要因って先生おっしゃったとおり、この資格制度を取るとこんなメリットがあるよっていうことをいかに用意するか、もういかにカッコ良く皆に見せて、皆にPRして、皆で称賛して、皆の回りで進めてっていうことをやっぱり同時に考えていかないといけないなと思います。

(矢ヶ崎部会長)

そうですね。はい。本当にそうだと思います。ありがとうございます。

今、鈴木委員からご指摘ありましたけれども、私も前回の議題の中でホームページのことを気になってます。なので是非、検討進めていただき共有いただけると大変ありがたいと思います。もちろん次回で結構ですので。荒井委員いかがですか。

(荒井委員)

私もちょっと決意表明的になりますが、若いガイドが育ってないとか入っていない問題は、僕らの責任だなあと感じてまして、頑張ります。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

そんな荒井さんの責任ではないと思いますが。

(荒井委員)

でも、実際問題、大雪山の旭岳の周辺のガイドをリストアップすると、確かに私2000年に東川に引っ越したんですが、その後来たなって人、僕よりも年下の人はそんなに多くないです。4人、5人ぐらいです。だから20年で5人ですよ。そういうふうに考えると、20代でパッと思いつく地元に住んでるガイドはいないです。

(矢ヶ崎部会長)

なるほど。

(荒井委員)

札幌から来る人はいます。色んなところ行ってるようなガイドさん。はい。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

プッシュ要因も、ガイドさんになると、こんなに素晴らしいですよっていう、みんなで盛り上げていくっていうことの中で、特にやっぱり若者については、重点ターゲットとしてやっぱり考えていかなきゃいけない感じですね。

はい。石山委員いかがでしょうか。

(石山委員)

難しい問題ですよ。いかにメリット、当然メリットもあるけども、そこに至るデメリットとかもちゃんと話をして納得して、新しくアウトドアガイドを目指してもらえれば良いなと思

っています。

そのためには、ここの議論だけではなくて北海道の観光政策全体の話になってくると思うので、その辺がうまくミックスしていけばいいなというふうに思います。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。

確かに、良いお客さんが来続けるっていう。こっちのお客さんが来続けるっていうところなんかは北海道全体で取りまなきゃいけないっていう話も随分あると思いますので、やっぱりみんなでやっていかなきゃいけないかなあという気がしますねえ。はい。すいません。

八木委員いかがですか。

(八木委員)

先ほどガイドの数について過去の意見を繰り返しましたが、同じ意見をまた言ってしまったのは、今年の夏に雑誌「北海道生活」でアウトドアガイドの特集をさせていただいたからです。鈴木さんや皆さんにもお世話になったんですが、一般のお客さんにはなかなか伝わりづらい、ガイドさんと旅をする魅力、しかも、ちゃんとしたガイドさんとワイルドな北海道を安心して楽しむ魅力っていうのを、今回、私がAT部会で全く知らないところから学ばせていただいた結果として特集させていただきました。

その際、意外と資格を持っていないガイドさんが多かったのです。ちゃんと資格を持ってやってる人っていうのが結構限られていて、その人を探すのにかなり苦労したっていう経緯があったので、先ほどそういうお話をさせていただきました。

資格を持っていない人に、どうして資格取らないのか聞くと、「資格はなくても仕事はもらえるし、メリットがないから」と皆さん異口同音におっしゃる。良い制度なのに、「別になくても仕事はもらえるのに、なんか取る必要がある？」っていうふうに言われてしまう。そこは私もすごく忸怩たる思いがあって、強制的に医師免許みたいにするっていうのはちょっと暴論かもしれないけれども、これまでの議論にも出たとおり、この資格を持っている方が必ずお仕事をもらえて、生活が潤うっていう、そういった安心した資格であれば、若い方はどんどん増えてくると思うんですよね。

農業でも、休みなく頑張って北海道の土地と戦って新規就農したっていう人たちは過去の話で、今では、非常に組合とかがしっかりしていて、休みもちゃんとももらえるし、こういうふうな計画で農業ってできるんですよと、制度が整ってきている地域がいくつかあり、そういったところに若い方が新規就農で参加しているという現状もあります。この制度もブラッシュアップされて、受け入れる箱というか土壌がしっかりしてくれば、おのずと若い人たちが安心して、または道外から移住してきてこういう仕事を目指して来るのではないかと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。北海道で住むっていうことに価値を見出してくださる、あるいは北海道で住むと子育てがとってもしやすくて、子供の教育にも良くて、だから北海道を目指したいっていう移住系の人達の中で、ガイドを目指す人が一定割合出ると、これはまたちょっと素敵なことだなあというふうにも思ったりしますね。

とにかくガイドということで焦点当ててはいますけれども、なかなか昔から日本にはガイド文化がしっかりなかった中で、インバウンドの影響もあって、ガイドっていうものをしっかり北海道ではしっかり作ってこうというふうになると、ガイドのことだけじゃなくてすごくいろんなところが協力して、底上げをしていかないと難しいのかなっていうことを皆様のお話から改めて思ったりいたしました。

鈴木さんどうですか。

(鈴木部会長)

はい。やっぱりメリットを出してあげたいんですよ。

八木さんが作ってくれたあの本で、実は載ってる人すごいうれしくて。いやそうですよ、だってあそこに紹介してもらったっていうのはある程度ステータスもらったぐらいになるわけですよ。

だから、もしかしたら、表彰制度、矢ヶ崎先生と一緒に入りましたが、地球の歩き方さんが、本当に、プライベートの会社なのに、日本全国のガイド表彰制度を作ろうって今動いてらっしゃるんですけど。まさに北海道は、アウトドアのガイドでAT資格制度を持ってしっかりやっている人を表彰するんですとか、表彰していけば、多分、海外のエージェントにしる国内のDMCにしる、やっぱ当然興味を持ってくると思うんですよ。

だからそういう意味では、何かしらのちゃんとステータスを与えてあげるような仕組み、さっき矢ヶ崎先生おっしゃったとおり、案外北海道のガイドって移住者が多いんです。地元の方って地元の自然の価値ってなかなか気づかない、もしくは、それを生業にしようという方ってそんなに多くなかったと思うんですけど、そういう意味ではまさに地域における暮らしを維持できる仕事として、やっぱガイドの制度が、本来ATってそのために作ったはずですから。そこをぜひ進めていきたいなと思うのが一つ。

もう一つ、さっき観光振興機構の会議だったんですけど、理事会で出てたのは、シャノンさんがATWS終わって、素晴らしい、北海道は最強である、今まで19回のATWSでベストだったって言ったんですって。

しかし、調査にあったとおり、ガイドが面白おかしく、本当に楽しみ方を伝えるための英語力、ここだけ揃えばもう100点だよって、シャノンがまた言ってたんですって、大阪のシンポジウムで。だから、何が言いたいかというと、機構では、実はリクルートさんと相談して、機構の会員とかに英語のスクーリング？何て言うんですか、Webセミナー、Web研修、の仕組みを作れないかって相談してるんだそうです。

なんか、ATガイド資格制度取ったら、無料で端末で英語勉強できる資格が得られるとか、なんかそういうメリットも是非、そんなに大した予算がかかれないと思うので、検討していただければなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。今ご指摘の英語力の向上っていうのはきっと今ご提案があったようなことを含めた、あの手この手でやっていかないと、きっと。それが10年かけて上がれば良いて話ではなくて、令和7年までにビシッと上げていくみたいなことも考えると、ちょっとここも真剣に考えたほうが良いというふうには思います。

はい、ご指摘ありがとうございます。他の委員の皆様方は追加のご発言いかがですか。大丈夫ですか。はい、ありがとうございます。

それでは今日はですね、基本的に事務局ご提案の案がビシッと通っておりますので、事務局はその点ご安心をしていただきたいと思います。進めていく上での留意点であるとか、それから新たな課題なんかも、今のご発言で幾つか見えてきております。また、いつも事務局さんにはいろんなお願いしてお手間ばかりで恐縮ですけれども、踏まえていただいて次回また開催していただければと思います。

では、司会進行は事務局の方にお返しいたしますので、以降、よろしく願いいたします。皆様今日もご協力大変ありがとうございました。

(興水課長)

矢ヶ崎部長ありがとうございました。本日の議事は以上になります。今日は3点、指標等に関してご提案をさせていただいた点、すべて皆様方に承認していただいたということになりまして、今日でまとまらないかなと思っておりました。

なのでですね、また、次回もやるつもりではいたんですけども、皆さん方のご意見で、大丈夫だということで承認していただきましたので、今後、この指標につきましては、これから道議会の方にパブコメをするという報告をさせていただきまして、パブコメをしまして、それを受けて、今度は北海道観光審議会、この部会の親会の方にですね、会を開くというわけではなくて審議会の委員になってる方の皆様方に文書で報告するという手順で進めていくということになります。

本部会でございますけれども、今日、一定程度、方向性が決まりましたので、年度内はもう開催しないというのではなくて、もう1回か2回開催をさせていただきまして、先ほど皆様方からご意見等もありました、いろんな課題等について、審議を諮りたいというふうに考えております。

まさに先ほど鈴木委員がおっしゃっていただいた表彰の部分なんですけれども、表彰制度というところ部会の中で議論していきたいなというふうに考えていたところでございます。できれば来年度から表彰制度というのをスタートすべく委員の皆様のご意見を伺いながら、どういう制度にしたら良いのかっていうのをですね、考えていきたいというふうに考えていたところですので、ちょうどいいご意見をいただきましたので、次回以降、そこのところも、議論させていただきたいですし、前回、ご説明がちょっと中途半端に終わってしまいました但ホームページ等々についても決して我々忘れていたわけではございませんで、今日はこの指標の議論に時間がかかるかと思ひまして、議題を絞らせていただいたんですが、ホームページ等につきましても、また、皆様方にご報告というかですね、話をさせていただきたいというふうに思っております。

また、メリットの部分もですね、今はまだ言えませんが、これから、令和6年度の予算要求が道でも始まってきます。その中でも、ATガイドさんだけのメリットというご意見をいただきましたが、そういったところができるのか検討をしております。これは予算要求なので、最後まで我々が頑張っていかなければいけないというところですが、まだ今の段階では言えるところは無いんですけども、大体予算が決まってきた時点でご報告できるよう、我々も頑張っていきたいなというふうに思っております。

次回も、今言ったようなことを議論させていただくべく、また日程調整をさせていただきたいと思ひます。年内はですね、かなりちょっと年の瀬も迫ってきておりますので難しいかなあと思ひます。ちょっと幅広で、年度後半も含めて、今年の後半も含めて1月ぐらいまでの日程の中で、皆様方の日程調整をさせていただきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

本日は本当に長時間にわたりましてご議論いただきましてありがとうございました。

これもちまして、令和5年度第2回アドベンチャートラベル部会を閉会させていただきます。本日はありがとうございました。